

セントクリストファーネビスの夜

御宮狼

第四話

*

神谷町地下鉄駅ホームは狭い。朝ラッシュ時には進入してくる電車はホームに詰まった乗降客たちの腕や鞆を簡単に吹き飛ばす。今日もまた中年サラリーマンが当駅ホーム下に落下、走り込んできた電車に轢かれ即死した。身を投げたのか、すし詰め状態から線路へ押し出されたのか、不明のままだ。

朝、事故を目撃したという社員がランチをたべながら、同僚相手に嬉しそうに大声で話している。

*

「あなたこの会社ほんとうにご存じ？ 近代合理主義と一神教を背景に世界制覇を目論んで百年驍進してきた企業よ。原動力は技術への絶対的信念。アメリカの正義。なぜ今これを口にするのか分かる？ 日本法人のうろたえは尋常じゃない。優秀な成績はすでにフランスを抜き去って、あとはドイツのプライドを心配するだけ。よろしい？ これはスcoopよ。本国は今年アジアでの戦略を大幅に変更する。世界経済の潮流を讀んでの布石？ 違う。そんなものじゃない。肅正よ。乗り込んでくるのよ。アメリカが。本国の重役は本気よ」

「アジア諸国グループの統括本部機能を東京に設置し、本国から役員を送り込む」

「それも大量にね」

「日本法人のグループ内における格上げと大幅な権限の強化」

「おめでたいわ、あなた。この組織大改革を額面通りに受け取るほどお人好しじゃ困る。肅正と言ってるでしょ。本国の重役は連日のようにグループ本社に打電してるわ。日本に対するアメリカ本社の真の意向を知ってる？」

「もっと肥えろ、もっとピッチを上げろ。」

「鈍感ねえ、あなた。日本における占領政策をやりなおせ、よ」

プラスチックの皿にカーベンデッシュ種のバナナを置いて皮筋にそってフォークを引くと乳色の実があらわれた。ジェシーはその実をスプーンですくって食べた。香村は珈琲だけを注文した。

上司ジェシーは結果を欲しがらる人物だ。到達段階によってプロジェクトの進行状況を分析し、各個人の各段階の達成度を観察する。方向の修正は徹底して数字と論理に裏打ちされていなければならない。フランス語とイギリス語と日本語を自由に操り、管理者として完成された知性を披露する女史だが欠点は爪だ。形が揃っていない。手入れもなく、口に入れるバナナほどの艶もない。

ジェシーはいつも香村をランチに誘って打ち合わせの延長をやる。

彼女は書類のコピーを傍らに追いやり、珈琲で胃を整えながら香村の報告を聴いた。退屈な状況説明にジェシーは苛立ち途中で遮った。そして簡単な指示を済ませ、午後からのシンガポールへの出張を確認した。

「どうでもいいの、形式なんて。私の不在、あなたの存在。それは企業にとってどうでもいいことよ。企業だけが進化するの。あらゆるステージで有機的に創造がうまれることを切望するわ」

「あの会議は何？ 無味乾燥時間の無駄ね。着任してからまともな議論に出会ったためしがない。発想も枯れてる。独創もない。私一人がスピーチしてる。大変な非礼。お願いだからもうそろそろあの会議を何とかして頂だい。まず風景からでも変化をつけて。スクール形式はかならず私の講義に終わる。サークル状にしても効を奏さない。スクリーン眺めて日本茶飲みながらでもやる？ あなたからアイディアを出して。あなたがリーダーシップを発揮して。あなたが変わらなければこのシーンは変わらな

い」

「チームワークはいらない。生きる権利を放棄してる感じで苛々するの。責任も見えない。指示を一人一人の目標に徹底させて。報告は必ず文書で完成させて。そして何もかもタイムリーじゃなきゃ価値はないことを全員に認識させること。打てないものだからみんなで意味づけばかりやっている。時間はコストよ。致命的ね。繰り返すけど、それぞれの不在を補うのはやめて。それぞれの存在を問うのよ」

「それからもっとフランクにやりましょう。あなたとはもっとうまくやっていけるはずだわ。私のことはそろそろファーストネームで呼んで欲しい。あなたがやればみんなが目覚めるわ。なんだか埋められない国家間の文化的な溝みたいで困る。日本流のチームワークは私なりに学習したわ。そのうえで露悪の趣味だと結論するのよ。創造性からひどく逸脱してる。くどいようだけど不毛な形式はすべて排除したい。切望するわ」

残りの珈琲を一息で飲み干したジェシーは腕時計に目をやり、アクセントの強い日本語ですべてよろしくと言って立ち去った。

すべてよろしく、彼女の口癖だ。後ろ姿から心地いい音は響いてこない。磨り減らしたヒールが、O脚だが均整の取れた背の高いアイルランド系アメリカ美人を台無しにしている。それを指摘する者は社内にはいない。

プレートにヌードルを乗せ鼻歌を口ずさみ、ボールデンがジェシーの腰の振りを大袈裟に真似しながらやって来た。

「また打ち合わせか」

「いやスピーチだ」

「熱心なことだ」

「仕事の邪魔だ」

「悪党め」

「ほっといてくれ」

「どうでもいいけど、もうそろそろ誘ってやれよ」

「何が」

「とぼけるなよ。ジェシーさ」

「お前知ってるだろ。俺がベジタリアンだってこと」

「よく言うよ」

「早く切り上げて、人泳ぎしないか」

「ジェシーと行けよ」
「うるさい。どうするんだ？」
「またあのホテルか。夏だぞ。解放的にやろうよ。空気が濁ってる。屋根なしプールで泳いだらどうだ」
「健全についてお前に言われたくない」
「大きなお世話だ。それに今日はだめだ。来週なら空いてる」
「あいにく来週一週間出張で東京にいない」
「仕事か。熱心なことだ」
「すべてよろしくやるんだ」
「お前こそ、アメリカとニッポンの最強メッセンジャーボーイだ」

*

ファイバーガラスの巨大窓に焼かれた空が落ちかけている。真下を覗くと飯倉交差点の信号ランプにしたがって交通が停止と移動を繰り返している。

その日箇条書きしたメモ数枚と一枚のA四判の予定表をシュレッダーに飲ませ、香村は地上に降りた。

4

*

外苑料金所を過ぎると首都高速の流れは突然早くなる。林立する高層ビル壁を強い西日が照らした。ビル街を縫う高速道路の急カーブに光は乱反射し、多くのドライバーはこの時刻この死角で幻覚をみる。

*

操作の対象はアクセルとブレーキだけでは充分でない。大破したワゴン車がまた仰向けになって転がっているだろう。

熱湯みたいな夕日を受けて白いガードレールがダリの時計のように折れ曲がっている。

*

ホテルは全室内を十分に冷やしてクラシックのBGMを流していた。

スリーピースの男が足早にロビーのブースに入った。すぐに電話を切ると駆け足でプール脇のロッカールームに上がっていった。そしてロッカーに布袋を置くとすぐに消えた。

まもなくジャージ姿の男がカウンターに現われ、カードを出した。ホテルマンは簡単な操作をしてコンピュータで数字を確認し、指定ロッカーのキーを手渡した。男はまっすぐロッカールームの奥へ入っていった。

*

会員制高級ホテルは完全に秘密主義の屋内プールを都心に用意した。管理された水と空間のなかで限られた人々は交渉をはじめめる。クスリや銃やあるいは流通市場では手に入らない幾つかのものについて。

5

*

ビニール製の簡易リクライニングチェアに腰掛けてキミ子はパーマメントがきつく効いた髪に何度も櫛を入れた。隣のハルエはめくっていた通販の雑誌を投げ出し、腰の位置をずらして水着のパンツに指を入れ形を整えた。そしてウオークマンを耳に刺し、小柄な身体を横たえる。それぞれのチェアは平行に並んでいない。

女たちはなじみの顔だ。

プールサイドで時間を掛け体を磨き、いつも白昼から堂々と客を待つ。

*

ジャグジーを抜けてのぼせ上がった初老の男がぶよぶ

よした下っ腹の肉を撫でながら室内プールを出ていった。すれ違いに現れたのは白いバスローブを纏った髪の長い白欧系らしき女だ。黒いセパレートが均整のとれた白い体を引き立てている。キミ子とハルエは飽きた目線を女に投げた。

白い女は、布でできた椅子に大きなショルダーバッグを置いてから、黒髪を紐で束ね、ローブを脱いで水際に向った。プールに飛び込むと、しなやかな体と水面が鋭角をつくり、立体の水は破れ、しぶきとともに低い声をあげた。

白い女はしばらく水中を潜伏した。水面に上がりかけると紐が解けて黒髪は一瞬藻のように広がった。両腕をゆっくりと交互に繰り出していく。藻は閉じた。ばた足がよく水を押しした。女が作りだす波はアルバムをめくるようだ。

プールサイドの女たちはじっと盗み見している。

白い女の右手が壁に吸い込まれるように当たると両足は縮んで腰が回転し、藻がまた一瞬広がった。壁を蹴り、無駄のないターンで体はよく伸びた。黒い水着が水中をまっすぐに移動した。二十メートルを一往復すると横へ平泳ぎで平行移動し、鉄棒を利用して水から上がった。

プールサイドに乗った右足首の金色の輪飾が光った。全身から水が気まぐれに流れ落ちている。女はバスタオルで髪をいたわり、体を拭いた。そして、椅子に座って脚を組み、マニキュアで爪の色を直しはじめた。そしてバッグから香水を取り出し、数滴指につけるとそのままプールへ投げた。小瓶は完全な放物線を描いて水面を切った。

*

耳裏に液体をつけ終わると女はサングラスを掛け新聞をひろげた。だが時間をかけて読みはしない。椅子の下に投げてグラスの下で瞳を閉じた。

娼婦が投げた瓶は立体の水を一瞬気絶させて底に沈んでいった。瓶は香りのきつい液体で満たされている。微量だがプール全体を確実に染めていく。同時に揮発する何か。我々の嗅覚では到底認知できない。

水中を均等に拡散しやがて消えてなくなろうとするころ、波も消え、折紙のような水面に誰も入ろうとはしない。

*

香村は、水曜の夕刻から翌朝までの約十二時間をケイと二人だけで過ごすはずだった。

*

ケイは大きなあくびをした。

「見え透いてるわ」

「……」

「感じるでしょう」

いい加減にしてよ。女は苛立ちを隠さない。

「凡庸なメタファーがぞろぞろ歩いてくる。凡夫なる芸術家たち、善良な市民。枯れ果てた経済行為ね。貧乏人がいきなり金持ちになったものだから始末が悪いのね。無邪気過ぎるわ」

モデルがうごめく舞台へ向けて強烈なフラッシュが焚かれている。

「これは大失敗よ」

ケイは自慢の足を組み替えた。

「破壊は秘められる？ 洗練されればそれだけ創造は破滅的になるの？」

「限りなく。まるであなた……」

女は付け足し、黙った。

ロック音楽は突き上がり、天井からもまた叩き落とされていた。男は一瞬女の横顔を見た。

「あなたの、過剰で、ぶ厚い自信と同じよ」

香村は聴こえない振りをした。

*

創りだそうとする人々。陳腐なフレーズに誰もが不安

になっている。

夜男たちは目の前の女を落とすために。

抱かれた女は両腕を男の後ろに回して不明のひらがな文字をその背中に描く。

*

舞台奥から二人組みの女モデルが現れた。

黒人の体に密着した赤いシルクが気紛れに折れて波打った。長い足が交互に繰り出されるたびにシルクは割れて黒い太腿が現れた。

白いシルクを纏っている混血の女は立ち止まり、先行する黒人モデルを軽蔑する目で追った。

黒人モデルはステージの突端まで進んでいる。眼を左右に振るとステージ直下で金属のシャッター音が炸裂し同時に複数の光が放射した。モデルはギッとカメラ群を睨んで長い左腕で恋人を抱くように弧を描いた。右腕全体はシルクの下で見えない。浅い胸の山が微動した。フラッシュ光が連続放烈した。

示し合わせたように混血のモデルが歩きだし、ゲストやカメラ群を挑発したあと舞台先端で黒人と回転しながら交差した。

赤と白のシルクのダンスだ。二人は熱い抱擁のあと右と左へ分かれて消えていった。

音楽は止み、すべての光が死んだ。

闇の中で何かがうごめいていた。

突如ハードロックが鳴り和太鼓が響いてきた。光が復活した。

黒人の男女が裸体に毛皮のロングコートをはおり、三十人ほどの群れとなって固まっていた。しばらくすると群れは散り始め、一人ずつ離れてステージを走り回った。

まるで鳥のようだ。短い言葉を交わしている。纏まりのない髪から水が滴っている。男の視線は宙を掻き、女の口は開いたまま細い腕が無駄な弧を何度も描いた。

スモークが炊かれ風が打たれ続けている。ステージ奥から放たれた閃光がそこを突き抜け、色調を裂いていた。

舞台の突端を黒い鳥たちが占拠した。

「逃げようかしら」

「逃げようか」
「それでもいいわね」
カメラのフラッシュ光と炸裂音のなかで香村とケイの空疎な会話は水中を泳ぐように続いた。
「何か企んでるんでしょ？ あなた」
「そんなことはないよ」
「嘘」
「サーカスみたいだ」
「サーカスよ」
女は笑い出した。
「趣味の悪い騒動だわ」

*

二人は誰にも気付かれないほど静かに、深く呼吸した。高いコンクリートの天井に照明器具がぶら下がり、無数のコードが鳶のように絡んで納まっていた。

ステージには多数の毛皮が脱ぎ捨てられ、そこに照明と音楽が点滴のように落とされていた。

「いびつな時刻。詩的破綻」
「罨にはまって死のう」
「よく平気ね」
「華麗な人生こそ矛盾の束だ！」

ケイは高笑いした。

ショーはギシギシ音を立てて進んでいった。避け散った照明の残骸、フィナーレは近いだろう。二人は辟易したのだ。肉体の凡庸。音楽の凡庸。稚拙な演出。何より鳥はドタバタ劇を象徴した。そして知の欠落。衣装は演出の浅はかな心理を暴露した。デザイナーの表情をよくよく批判し、最後に女は放列するカメラの眼の暗愚を突いた。フラッシュ光を撃ち返すように息もつかず喋った。それは植物の根のように伸びた。終わってからでは遅い。安堵した顔を見るのは嫌だ。終幕を果たす前に私がここを出よう。ケイは思った。

「二人で無条件降伏しましょう」

椅子から立ち上がって男と女はショーを抜け出した。

会場に打たれ続けるロック音楽とは確実に異なろうとする足取りで人込みを掻き分けた。

女が男の片腕を引いて進んだ。
「すべては途中において完結をみ」
「何、それ」
「いつも終結から始まり」
「何よ、教えてよ」
「見ることはない」
「なによ、それ。教えて」
「少なくともここでは歴史はつくられないことはたしかだ」
「早くいきましょう」
「いこう！」
「運が悪いわ」
今度は香村がケイの腕を引き、腰に腕を回して先を導いた。
完全なエスコートだ。

*

1

ホテルの駐車場は熱で地獄のようだった。女は細すぎるハイヒールの先でタイヤの脇に落とした煙草の火の始末をした。それはソウルの街で見た光景と同じものだった。

女は脱いだ靴を後部席へ投げた。シートのうえで左右の赤いヒールは牙となって上を向いた。

女が車に乗り込む姿はいつも優雅で完璧だった。外に流れたドレスの裾を引き入れ、愛車のドアをボタンと閉めた。バックミラーを斜めに下げて口紅を引き直した。

車が振動し、低い唸り声をあげた。車は後退し、二度ハンドルを切り替え前進した。轢きかねないほど香村に接近して停止した。

何も言わず男が同乗すると無言のまま女は車を出した。繊細な操作で車は四周螺旋を回り、駐車場から地上へと向った。ヘッドライトが曲線のきつい壁を照した。出口で警備員が手を軽く上げた。通過した。

地上の光で二人は眩暈した。クラクションが後ろを何度も咬みついた。

熱で熔けそうになるアスファルトを膨れあがった都心の交通量がさらに痛めつけていた。

女はラジオのボタンを押してからサングラスを掛けた。
男は胸のポケットに煙草を探った。煙草はない。その手でネクタイを緩めた。

昨夜関東地方を直撃した台風は温帯低気圧に変わって北海道東部沖に抜けた。新たに小笠原諸島南西部に接近しながら小台風が生まれている。中心気圧と最大風速と予定進路を告げてニュースは歌番組に変わった。

渋滞に入った。

台風が抜けていった街は異常な熱と風でおかしくなっていた。全開の冷房が息を切らすようだ。

ラジオを切った。

「匂いって、あなた、撮れるとおもう？」

言葉と同時にケイは急ブレーキをかけた。香村はドライバーを見た。眼が合った。女は再度前方に視線を戻し、ゆるゆると車を動かした。男は鞆から取り出した煙草に火を点け、窓を落とした。熱風が侵入した。

車が滑りだした。ウインカー。白い腕が左へ切られた。ふたたび流れができた。

「愚問だったかしら」

赤。急停止。

ケイはバックミラーで髪のを直し、つんと前を睨むと急発進した。つぎの言葉を捜しているようだった。

無言。隣に車が滑り込もうとする瞬間。

*

短くなった煙草の始末をした。嵌め込みの灰皿に女のセーラムが一本長過ぎるまま折れ曲がり投げられていた。

「ソウルはどうだった？」

「ずっと雨だった」

「ずっと？」

「ああ、ずっとだ。斉州島にいった連中はもっと悲惨だった。台風と心中するって水浴びしたらしい」

「半島にも台風はあるの？」

「・・・さあ」

気のない返事をしてから香村はまた煙草に火を点けた。

「ソウルでおもしろい子に出会ったよ」

「あ、そう」

ハンドルを切った。
「優秀ね」
「何が」
「気象衛星。ラジオの天気予報、毎日出してるんでしょ」
「毎日どこるか朝昼晩に夜、深夜、どこの局でもやっ
てる」
「モニターで一秒一秒地球の気象を監視してるってわけ
ね」
「宿泊したホテルで殺人事件に遭遇したよ」
「殺されたのは誰？」
「知らない」
「犯人は？」
「さあ、どうなったか」
「ソウルってよく起きるの？ 殺人」
「さあ」
「そう言えばオリンピックは来年だったかしら」
「さあ」
「どうでもいいのね」
「ああ」
「気象不良って知ってる？」
「え？」
対抗車線。現れた車は一瞬逆光のなかで消えた。
「で何だっけ」
「・・・」
「匂いの撮影？」
「もういいわ」
「そうか」

1

*

ハンドルに軽く右手を添えて前方を睨んだ。
アクセルに白い素足が乗っている。ブレーキ。アクセル。
さらにアクセル。ケイは見事な手捌きでギアを操った。
女は、取材のために貪欲に海外へ出る。それは学生時
分から変わっていない。
これまでは主に世界の少数民族や文明の軋み、第三諸
国の底辺で生活する人々、遺物や痕跡を対象としてきた

が、最近はむしろ偶発する出来事、事故や事件といった現在の事象を題材に動き回っている。

技術じゃない。むしろ邪魔になる。そこにいること。その場に立っていること。徹底した現在への執着で私はレンズと心中する。それだけだ。この世が完璧な警察国家でモニターテレビが世界の隅々まで設置され二十四時間終始自動撮影されても、私は勝てる。そのモニターをやっつけてやる。私には執着があるわ。

レンズは私の眼であり焼かれたネガは私の意志だ。

だがケイは溜め息をついた。

歴史に、私はいつも乗り遅れている。決定的な瞬間とめぐり合えない。私はいつでも準備万端よ。どこでも行くわ。誰とでも会う。つねに対象へ近づこうとする。ギリギリまで接近する。意志は持続できる。だけど決定的な瞬間はやって来ない。待っていてもしょうがないからシャッターを押し続けるけれど、シャッター音だけが乾いて響く。押す指先の運動にすぎない。いつも歴史は私を素通りしているのよ。激突はない。歴史に間に合う。欲望は写真家を卑屈にさせるわ。

1

現在というものにかかわり続けていこうとする限り、不安は絞りだすしかない。地平は未来の姿をあらわしてはいないわ。むしろ何も見えない。見えないままに未来を変える歴史と衝突してる。それが日常？ 見えないものが見えたとき、いいえそれは幻影でしょう。いや過去？ いいえ希望？ いいえ、歴史は気紛れにすぎない。歴史とかかわる悲哀はそこにあるの？

ケイは歴史に間に合うジャーナリストたちの幸運と自らの技術の高低を弁明した。

私が撮る歴史は私が煽動しているに過ぎない。

ケイは深く落胆した。

失くしたコンタクトレンズを捜すように写真は守備範囲を限りなくギリギリと拡大してきた。大学の運動場を越え、国境を越え、日付変更線を越え、時差と戦い、体制や時代背景を越えてフィールドはしだいに地球規模になる。

しかし仕事に自覚的になればなるほどレンズを向ける写真家自身の居場所は消えていった。行動半径の盲目的な拡大主義は不安を増幅するだけだった。革命に立ち会う。歴史に遭遇する。欲望と孤独と焦燥のなかで、もが

けばもがくほど決定的瞬間は遠ざかり、激突はますます観念だけのものとなるようにおもえた。ついに写真家は視力を衰弱させ、何も見えない状態にはまり込んでいく。

何も見えない。それは写真家にとって死を意味するだろう。視界ゼロ。視力もゼロだ。

写真家は自分自身を見失い、やがてバランスを失っていく。遭難。女流写真家は最近その言葉を自嘲しながら多用する。

その場所へその瞬間に立ち合う。それは難しい。

*

もともと女はスピードの加減に長けていた。

右手を軽くハンドルにあてがい、唇をつぼめまっすぐ前方を睨んでアクセルだけを頼りに風をつくる。

よそ見しないで！

なんだよそれ。

ケイは裸足とアクセルの一体感を楽しんでいる。ケイは愛用の国産車に力を込めた。飛ばすことに特別の意味を被せるように。

窓にきつい流線形ができた。街には気の早いネオンサインが点灯し、太陽光線がまるで蒸気のようにそれを薄くした。

乱れたりズムでタクシーが走り去った。タクシードライバーの能面のような顔。一瞬だった。

国民的スピード。

え？

なに？

何でもないわ。

二人は唐突過ぎた。発端もない。会話は飛躍をかさねる。特別の意味は後方へと飛び去った。香村は深く吸って煙を吐いた。コンパクトディスクに手を伸ばし、鈍い金属音のあと音楽は密室に漂った。

「似合うって、とても大事なことだわ」

速度を上げた。爆音に引きずられ、車の重心が重なった。

「パレードもカーニバルもハイウエーもビルディングも橋も……」

香村は黙っていた。

「何もかもが似合っていない」

ケイはまた溜め息をついた。

「お似合いの恋人を撮ってみたいとおもうのよ。お似合いの結婚。年老いた夫婦。しっとりとして落ち着いた都市の風景……いま私が撮ってるのは逆。不似合いなものばかりよ」

女はバックミラーを一瞥し、車線を外へひとつ流してメルセデスを抜くといっきに右へ縫った。力は裸足のアクセルへ集中している。左へ流した。女の耳にぶらさがり透明石が揺れた。フロントガラスからドアガラスへコンテナ車がゆっくりと後退していった。

女の脚がさらにつよい力を込めると前景がぶれ、対抗車線を黄色のセダンが飛び去った。

「私の写真は、ジャーナリズムじゃない」

風が見えるようだ。

*

1

「いったい何をやってきたんだろう」

女は言った。

男は音楽のボリュームを上げた。煙草のパッケージを解いて真新しい一本に火を点け、煙を吐いた。気流が煙を後ろへと押していった。窓を開けると熱風に煙はいつきに雨散霧消した。

「文明の告発なんてばかみたい」

女は核心に向かっていきたいのだ。

「レンズの先に被写体はいない」

男はコンパクトディスクを手にとって眺める。ワーグナーか。

「頭脳をクリアにしようよ」

「ワーグナーの勝利ね。被写体、素材。バッファローみたいに向かってこないかな」

「勝利者の啓示を聴こうよ」

「バランスを捨てよう」

「神様信じるか。人類愛に絞るか」

「ちゃかさないでよ」

「闘牛士を殺しにいこう」

「いつだって謎を撮りたいっておもう。華麗な世界に憧

れてるつもりはさらさらない。暗示的なものにはいつも引かれる。引かれるように……」

写真家は前方の車を光で威嚇した。

「そのように私は立っていたい。私のほうから向かって
いるのよ」

「神の啓示を聴こう」

「待てというの？ ひどい」

男が笑うと女も合わせた。

「相変わらず楽道家ね、あなたって」

おそらく写真家は待つことはできないだろう。

政治的な混乱や差別や貧困を撮りつづけながら女は幻想と謎を追う。しかし謎を押せば押すほどそれは消滅していくように思われた。いっぽうで強烈な自我は偶然と運にひざまづくことを拒絶する。文明の残像。告発というより勝負を捨てた甘ったるい感傷で色付けされた静物画。負け犬だ。

「ひかり、上げたら」

男は言った。

軽蔑するように女はバックミラーを見た。ヘッドライトを遠目にした。

1

*

後部シートに転がった裸のカメラと赤いハイヒール。円形のレンズが車の天井を狙っている。冷房のためカメラはよく冷えている。何より獰猛である。隣で二つのヒールの先端がカメラを威嚇している。

破壊されない。私の写真は破滅を待つこともなく、その予告もない。私の写真はただ強靱なだけだ。ケイは深い溜め息をついた。

首都高速の交通量は減少した。喉がひどく乾いていた。ますます温度が上がるだろう。

車は猛スピードで東へ向かった。

*

ワーグナーの勝利は射程距離内に変化を据え置いたこ

とだ。

聴衆の耳を剃り落とせ。

ワグネリアンを信用するな。

問題なのはノイシュバンシュタイン城の完成だ。

*

少年兵クラウゼヴィッツの幸福は敵ナポレンの強大さだ。

*

ケイは突然気が変わり、香村を家まで送ると横浜に帰っていった。

香村はデッサを呼び出し、しこたま酒を飲み、深夜に料理を作って、たらふく食べた。